

(1999年夏号) 秋扇を売る ～狸小路のむかし～

札幌市内にある地名の中で、全国的に知られているのはどこだろう。やはり第一は“薄野”だろうが、第二は、雪まつり会場で知られる“大通公園”か、それとも商店街として有名な“狸小路”だろうか。

それにしても、百八十万人の人口をもつ札幌を代表する二つの盛り場が、共に、ススキノだのタヌキだのとまるで荒野の一隅のような名が付いているのは、近代都市との奇妙なコントラストがあって面白い。

薄野という地名のおこりは、札幌開拓のはじめ、ここに遊廓を建設する際、事業にたずさわった開拓使役人の名から採ったという説と、当時このあたりが一面のススキの原だったからだという説がある。

狸小路の名は、この官許の公娼に対して、現在の一、二丁目あたりで私娼が商売を始めたことが由来だという。この私娼の別名を白首(ごけ)といい、白首が客をたぶらかすことから、さらに狸とも呼ばれ、私娼のたむろする小路ということで、狸小路になったのだからか。この私娼を置いていた白首屋は明治二十四年に薄野に移され、以降は商店街としてのみ発展していくのだが、狸小路の名だけはそのまま残ってしまった。名誉な名前とは云い難いが、今になってみれば、その珍奇さが却って魅力的だとも云える。

北海道で商いをしている小売商にとって、狸小路はあこがれの地だという。「たとえ一間半の間口でも良いから、狸小路に店を持ちたい」というのが、商人(あきんど)の願いなのだという。狸小路は、今でも北海道唯一の商店街というわけだ。

道内で、装飾電灯(スズラン灯)を設置したのも狸小路が第一号、アーケードをつけたのも第一号。商店街として道路舗装をしたのも第一号だ。北海道内の商店街は、狸小路の先駆的な試みを見習いながら充実をはかって来た。

私が記憶している狸小路は、今からざっと六十年くらい前からで、日中戦争の頃だろうか。その頃はまだ当時なりに物も豊かな時代だった。私の家は山鼻の住宅地にあり、そうひんぱんに狸小路へ親に連れていってもらう機会にはなかったが、狸小路といえば、スズラン灯、そして明かるい店の列、店員が必ず店に出ている事などがいまだに記憶にある。

明かるいといっても、当時蛍光灯やネオンサインがあるわけではなくスズラン灯だって現在の住宅地の街灯程度、店の灯りも白熱灯の裸電球が何灯か、といったぐらいで、今ならその暗さに逆にびっくりする位だったろう。でも当時としてはそれが目のくらむほどの明るさだったのだ。店員が店にいるのは今は当たり前だが、昔は、客が奥に声をかけると店の者が出て来るのが普通で、私の家の近くの東屯田商店街の各店も、店員は店先におらず、表のガラス戸も閉ざしたままだった。それが狸小路では、客がいなくても店員が店内に立っていた。子供心にそれが不思議でならなかった。

そんな頃のある年の札幌祭りの当日、サーカスが例によって創成河畔に小屋掛けをしていた。例年ならば自宅から中島公園を斜めに横切るような形で創成川へ行き南から北へ見世物小屋を眺めて帰るのが、その年に限って父親が、狸小路を通過して河畔へ出る道をたどった。昼時だ。三丁目から二丁目へと進むたびに人が増え、肩がふれ合うどころか、満員電車のような混みようになってしまった。これほどの人の群れに巻き込まれたのは、これが初の体験だった。小学校低学年の頃のことだ。夜の狸小路の明るさと、昼の狸小路の混雑ぶり。狸小路は普通の所じゃない、と子供の頃はそう思っていた。

しかし、狸小路で育った年配の店主さんたちの話によれば、戦前の狸小路は夜が更けて、映画や劇場がハネてからがにぎやかで、市内の人達も夏は家で夕食を終えてから、浴衣に着換えて、散策がてら買い物に来たものなのだそうだ。太平洋戦争が始まって、夜十時以降の開店が禁止になる前までは、いわば深夜が売上げのピークだったという。

売上げといえば、我が家にちょっぴりわびしく物哀しい話がひとつある。大正の終り頃のことだ。私の祖父と祖母は、事情があって故郷の新潟を追われて札幌へやって来た。職のあてがあるわけでもなく、わずかな知人を頼っての事だった。

追われた原因は祖父の血気が盛んすぎたという事だろうか。祖父ばかり気炎を上げ、祖母はその日の糧を求めのりに苦勞したらしい。その祖父が札幌で気付いたのは、札幌の人は夏に団扇をあまり使っていないという事だった。そこで祖父は早速新潟の間屋に注文を出した。「質の良いシャれた絵柄の団扇を送れ」

数週間たって団扇が届いた。しかし札幌の夏は短い。すでに秋風が吹いていた。「なに、この見事な絵柄だけでも売れるはずだ」祖父は強気だった。祖母はやむなく、狸小路の商店の軒下を借りて露店を出した。誰も立ち止まってくれなかった。あきれた顔でふり返って行く人もいたという。「あげく売れたのは一枚だけ。どこかの奥様が、可哀相にと云って買ってくれた」

祖母がぼつりと私に話したのは亡くなる数年前。祖父の死からは二十年も経ってのことだった。

さて、太平洋戦争の敗色が濃くなって、狸小路からシンボルのスズラン灯が消えた。一つには鉄類の回収にあったことと、また電力の節約や空襲に備えての消灯。そして売る品物の無くなった店が次々と閉店していった。正に灯の消えたような状態で冬は、あの狭い道筋に雪ばかりがうず高く積まれていた。

ところで、かつて狸小路の一丁目の道幅は現在の半分しかなかった。札幌祭りの混雑も一丁目の狭さに起因していたのかもしれない。一丁目は北側が張り出していたのだ。昭和二十年、終戦の直前に、ここが強制的に拡幅され、ほかの丁目と同じ道幅になった。空襲の延焼をさける目的だったのだろうか。拡幅で出来た空地に勝手に開かれたのが、戦後すぐの間市だった。狸小路の戦後のあきないは、ここから再開された。といっても少なからず荒っぽい再開ではあった。今はもうないが、ここには観音様のお堂もあり、狸小路のシンボルの一つでもあった。間市はまるで門前町のような、奇妙なにぎわいをひととき一丁目にもたらしたものだ。その観音堂を借りて、即席の英会話教室が開かれていた事もあった。終戦直後のひと駒である。